

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ニューヨーク 親切的なロシア料理店

2019年/デンマーク・カナダ・スウェーデン・ドイツ・フランス
合作映画

配給：セテラ・インターナショナル/115分

2020 (令和2) 年 12 月 29 日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

監督・脚本：ロネ・シェルフィグ
出演：ゾーイ・カザン/エスペン・
スメド/ジャック・フルトン
/フィンレイ・ヴォイタク・
ヒソン/アンドレア・ライズ
ポロー/パット・ソーントン
/デビット・マクレーン/グ
ーガン・ディープ・シーン/
ケイレブ・ランドリー・ジョ
ーンズ/タハール・ラヒム/
ジェイ・バルチェル/ビル・
ナイ/ニコライ・コペルニク

👁️👁️ みどころ

格差社会の拡大とその問題の深刻化は日本のみならず、韓国も中国もそしてアメリカも同じ。もっとも、ニューヨークで100年も続く老舗のロシア料理店“ウィンター・パレス”の経営がダメになったのは、コロナ禍のせいではなく、自己努力の不足だが・・・。

『天外者 (てんがらもん)』(20年)は、五代友厚を軸とした面白い青春群像劇だったが、本作は2人の子供を連れて、暴力亭主からニューヨークのマンハッタンに逃げ出した主婦を軸とした、“掃きだめ人間”の群像劇。よくまあこんな掃きだめ人間ばかり集めたものと感心するが、デンマークの女性監督ロネ・シェルフィグはなぜこんな面白い脚本を書き、自ら監督したの？

世界中の人々がコロナ禍につまずいた2020年ラストの心温まる物語をしっかりと鑑賞し、つまずいた人生をやり直す元気を新たにしたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■デンマークの女性監督がなぜこんな映画を？■□■

本作の原題は『THE KINDNESS OF STRANGERS』と抽象的だが、邦題の『ニューヨーク 親切的なロシア料理店』は具体的でわかりやすい。ニューヨークのマンハッタンには、「ロシアン・ティー・ルーム」という有名なロシア料理店があるそうだが、邦題とされた「ニューヨーク 親切的なロシア料理店」の名前は「ウィンター・パレス」。同店は創業100年を迎える老舗の格式高いレストランだが、今は惨憺たる状況に陥っているらしい。本作は2019年2月7日に、ベルリン国際映画祭のオープニング作品として上映されたから、新型コロナウイルス騒動発生の1年前。したがって、「ウィンター・パレス」の経営破綻の原因はコロナではなく、もっと根本的で構造的な問題にあることは明らかだ。すると、本作を鑑賞するについては、その構造的な問題をしっかりと考える必要があるが、映画とし

てはその問題追求よりも、そこに集まる諸々の人間模様を描くことをテーマにしているから、それに注目！

そんな本作の脚本を書き、監督したのはデンマークの女性監督、ロネ・シェルフィグ。私は彼女の出世作になった『幸せになるためのイタリア語講座』（00年）を観ていないが、『17歳の肖像』（09年）（『シネマ24』20頁）、『人生はシネマティック』（16年）（『シネマ41』未掲載）は観ている。パンフレットにある「Production Notes」の中で彼女は、「テーマとストーリーはずっと深く調べたいと思っていたもので、ある時点で線と線が絡み合い、一つの映画として成立させる術を見つけました」と語っている。また、「監督インタビュー」では、「これは大きな問題を提示している映画だけれども、普通の人々がどうやって生きていくかについても描いていて、実は見知らぬ人から多くのことが学べるということを教えてくれるのです」と語っている。本作については、鑑賞後、この2つは必読！

■□■ヒロイン役をエリア・カザンの孫娘が熱演！■□■

1950年代のハリウッドに、彗星のごとく登場した俳優がジェームズ・ディーン。中学生時代に3本立て55円の映画館で観たエリア・カザン監督の『エデンの東』（55年）は、感受性豊かだった当時の私に強烈な印象を残したうえ、そのテーマ曲は私にとって映画音楽ダントツのベスト1の曲になっている。

1950年代の「赤狩り」の中でハリウッドを追われたチャールズ・チャップリンの娘であるジェラルディン・チャップリンは、1960年代に『ドクトル・ジバゴ』（65年）（『シネマ38』未掲載）や『悲しみは星影とともに』（66年）等で大活躍したが、本作では、エリア・カザン監督の孫娘であるゾーイ・カザンが、ヒロインのクララ役として終始一貫スクリーン上に登場するので、それに注目！ジェラルディン・チャップリンと同様に（？）格別の美人というわけではないが、彼女の表現力、演技力の確かさはジェラルディン・チャップリンと同じように本物だ。

もともと、本作では、暴力亭主のリチャード（エスベン・スメド）から逃げ回り、あくまで長男のアンソニー（ジャック・フルトン）と次男のジュード（フィンレイ・ボイタク＝ヒソン）の2人を守り抜く、たくましく母親役だから、本作にエッチシーンが全くないのが少し残念だが、それはぜひ次回作で！

■□■青春群像劇ではなく、雑多な掃きだめ人間の群像劇！■□■

近時は日本でも“格差の広がり”が強調され批判されているが、それは韓国も中国もアメリカも同じ。とりわけ、トランプ大統領登場後のアメリカは、人種差別問題の深刻化を含めて、格差の広がり的问题点が指摘されてきた。しかして、本作冒頭に登場するのは、車に2人の子供たちを乗せて、マンハッタンの街に入ってきた主婦・クララ（ゾーイ・カザン）だ。

バッファローというニューヨーク郊外の街から、橋を越えて摩天楼がそびえる夢の都会・マンハッタンに入ってきた彼女は、明るく子供たちに「ニューヨークを観光しよう」

と話していたが、実は、警察官でありながら暴力をふるう夫・リチャードの家から何とか逃げ出てきたらしい。身分証もなく、カードも現金もなく、あるのは夫名義の車だけという彼女は、まず夫の父親を頼り、「2、3日泊めてくれ」と申し出たが、息子の恐さを知っている(?)父親からは、「悪いが、どちらの味方もできない」と拒否されてしまったから、アレレ……。もちろん、2、3日は車の中で寝ることもできるが、食事は?着替えは?お風呂は?

去る12月12日に観た『天外者(てんがらもん)』(20年)は、五代友厚を軸に、坂本龍馬や伊藤博文、岩崎弥太郎を中心にした青春群像劇だった。それと同じように、本作も冒頭に登場するクララを軸とする群像劇だが、大きく違うのは、本作は青春群像劇ではなく、掃きだめ人間の群像劇と言うことだ。したがって、クララに続いてスクリーン上に次々と登場してくる、マンハッタンで暮らす掃きだめ人間たち、1人1人に注目!

■□■本物とは大違い!店が落ちぶれると客も・・・?■□■

私はニューヨークの街は全然知らないが、ニューヨークには、ダスティン・ホフマンの女装姿が話題になった映画『トッツィー』(82年)をはじめ、『愛と喝采の日々』(77年)、『マンハッタン』(79年)、『ニューヨーク・ストーリー』(89年)等の映画に登場した、「ロシアン・ティー・ルーム」という高級ロシア料理店があるらしい。そこには現在、全米ゴルフ協会が入っており、外見の壁にある熊の金の彫刻は以前のままで、かつてはカーネギーホールに近いことから、多くの芸能人や関係者が利用していたそうだ。

「ウィンター・パレス」もかつてはそれと同じような高級ロシアレストランだったから、客もそれ相応だったのだろうが、現在のオーナーであるティモフェイ(ビル・ナイ)の投げやりな姿(?)や、ロシアなまりの英語を売り物にする(?),ドアマンのジェフ(ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ)のいい加減さ(?)を見ているだけで、経営破綻の実情がよくわかる。そのうえ今、「ウィンター・パレス」内のテーブルでは、刑務所から出所してきたばかりのマーク(タハール・ラヒム)が、弁護士で友人のジョン・ピーター(ジェイ・バルチェル)とささやかな祝いの杯をあげていたが、何とそのマークが、かつてレストランを経営していたという理由だけで、この店を立て直す“マネージャー”としてスカウトされることになったから、こりゃひどい!

他方、そんな「ウィンター・パレス」に入ってくる客は如何に?いつも一人で来ている常連の女性客・アリス(アンドレア・ライズボロー)はそれなりの上客だとしても、お腹を空かせた息子たちのために、客を装って店に入り込んだアリスが、パーティーのオードブルを持ち帰ろうとするのを目撃したにもかかわらず、マークはそれをとがめないばかりか、逆に心配そうに見送ったから、こりゃメチャクチャ!

こんな風に、本作における「ウィンター・パレス」は「ロシアン・ティー・ルーム」とは大違いだ。店が落ちぶれると客も・・・?

■□■アリスのキャラに注目！こんな“女神”が現実に！■□■

本作の主演はクララだが、“青春群像劇”ならぬ、“掃きだめ人間群像劇”たる本作のストーリーを牽引するのは、クララを含めたすべての“掃きだめ人間”の「心のよりどころ」になる“女神”のような女性・アリス。アリスは、救命病棟で看護師として働きながら、教会で「赦しの会」なるセラピーを運営し、さらに無料食堂でも働いている、何ともパワフルな女性だ。

イエス・キリストは、罪人たる人間のすべての罪を背負って一人で十字架にかけられたが、アリスもそれと同じように（？）、結婚をはじめとする自分の幸せは横に置き、「他人のために生きること」を生きがいとしている女性。私は72年になろうという人生で、1人だけそういう女性を知っているが、アリスのような女性はメッタにいるはずはない。しかし、“掃きだめ人間”ばかりが登場する本作で、「ある時点で線と線が絡み合い、一つの映画として成立する」ためには、きっとアリスのようなヒロインが必要だったのだろう。

しかし、クララがストレス、ギリギリの状態でその日その日を生きているなら、一見安定しているかのように見えるアリスも、肉体的、精神的にストレス、ギリギリの状態で生きていることは明らかだ。したがって、万どこかでその緊張の糸がブツリと切れたら、さあどうなるの？当然そんな心配もあるが……。

■□■ここにも悪徳警官が！米国の病巣はここに！判決は？■□■

2020年5月25日に起きた、米国警官による黒人男性ジョージ・フロイド殺し事件は、黒人差別の象徴として全米を揺るがす大規模デモに発展したが、ハンサムで、口から出る言葉に何の違和感もない警官・リチャードは、一皮むくと暴力亭主らしい。しかも、長男・アンソニーの説明によると、アンソニーに、次男のジュードを殴ることを強要したというから、そのやり方も陰険。私も小学校の低学年の時に、母親や子供に暴力をふるう父親を一時「殺してやろうか」と思うほど憎んだこともあったが、本作に見るアンソニーの“反リチャード”魂は強烈だ。

警官の情報網をフルに活用して、ウィンター・パレスで食事をしている（？）クララたち母子のテーブルに、いきなりリチャードが座ってきたことには母子も驚いたが、そこで、「俺が悪かった」と素直に謝る（？）父親を一切信用せず、一瞬の機転で「トイレに行きたい」と申し出て母親の脱出を手助けしたアンソニーはお見事だ。

他方、本作後半ではクララ捜しを巡って言い争いになった父親を、リチャードがいきなり殴り倒すという“暴拳”を見せるからビックリ。そんなリチャードに怯えるクララからの相談を聞いたマークは、弁護士のジョン・ピーターに正式にリチャードとの“ある裁判”を依頼することになるから、後半はその展開にも注目したい。本作ではその法廷風景は細かく描かれないが、ジョン・ピーターは優秀な弁護士で、弁護活動は適切だったらしい。その結果、リチャードに対して下された判決は……？

■□■掃きだめ人間たちの収束は？それぞれの“幸せ”は？■□■

とりたてた特徴を持った掃きだめ人間ではなく、どこにでもごろごろころがっているような掃きだめ人間の典型が、手先が不器用で、仕事上でもドジばかり繰り返している男・ジェフ。彼の不器用さは手先だけでなく、人付き合いでも同じだから、どんな仕事についても、また、どんな集団の下に置かれても、いつも掃きだめ人間に……。また、「ウィンター・パレス」のドアマンであるジェフも、店が続いている間は給料をもらえるだろうが、転職は到底無理な掃きだめ人間だ。また、たまたま「ウィンター・パレス」のマネージャーに抜擢される幸運に恵まれるものの、刑務所から出所したばかりのマークも、その友人の弁護士ジョン・ピーターも、アリスが運営する「赦しの会」に通わなければ生きていけない掃きだめ人間だ。しかし、本作は前述の通り、ロネ・シェルフィグ監督が「テーマとストーリーはずっと深く調べたいと思っていたもので、ある時点で線と線が絡み合い、一つの映画として成立させる術を見つけました」と語っているように、線と線とが絡み合い一つの映画と成立していくのでそれに注目！その手法の見事さは際立っている。

もっとも、本作に登場し、群像劇を形成していくのは、「赦しの会」と「ウィンター・パレス」を舞台としたさまざまな掃きだめ人間たちの私的な群像劇で、社会性を持った物語ではない。唯一社会性を持つのはクララの夫で警官のリチャードを巡る裁判だけだ。しかし、冒頭に2人の子供を車に乗せて、ニューヨークのマンハッタンに登場したクララを軸として展開されるさまざまな掃きだめ人間たちの群像劇はどのように収束していくのだろうか？それをしっかり確認していくとともに、本作の最終局面では、「ウィンター・パレス」と「赦しの会」を結集点として集まっていた“掃きだめ人間”たち、それぞれの“幸せ”についてもしっかり確認したい。その上で、世界中の人々がコロナ禍につまづいた2020年ラストの心温まる物語から、それぞれのふらついた人生をやり直す元気を新たにしたい。

2021（令和3）年1月4日記